



小川秀明（札幌国際芸術祭2024 ディレクター／アルスエレクトロニカ・フューチャーラボ 芸術監督）
SIAF2024ディレクター。オーストリア・リンツ市にあるアルスエレクトロニカにて、アーティスト、キュレーター、リサーチャーとして活躍。現在は、同機関の研究開発部門であるアルスエレクトロニカ・フューチャーラボの芸術監督・マネージングディレクターを務める。

細川麻沙美（札幌国際芸術祭事務局 統括マネージャー）

SIAF事務局統括マネージャー。SIAFには初回の2014年から事務局に所属。テレビ局での展覧会制作・運営を経て、2008年から、企画・展示業務を中心にさまざまな展覧会などに従事。

トーク内容

- ・ 創造的“衝突”の不十分さがSIAF2024の心残り
- ・ SIAFの国際性は、回を重ねるごとにアップデートしてきた
- ・ ヨーロッパとアジア、芸術祭における国際性とは
- ・ 「独自性」こそ国際性を引き出す鍵
- ・ 既存の国際ネットワークを活用できるのでは



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
https://youtu.be/9mBTI_jK90A



Q 国際芸術祭の「国際性」とは？

小川：私が住むヨーロッパは戦争を繰り返してきた歴史的背景があります。芸術はその反動として、対立を乗り越え人々をつなぐ役割を持っているようにも思えます。ヨーロッパの芸術祭が、より良い未来をつくるためのプラットフォームであり国際的であることは、ある意味自然な流れだと感じます。

SIAF2024でも、国際色豊かなアーティストを呼んで、普段の札幌じゃなかなか知ることのない視点や価値観を市民の皆さんに届けました。でも正直、もっと踏み込みたかった。国際色豊かなアーティスト同士、またはアーティストと市民が出会い、対話し、新しい何かを生み出す。そんな『クリエイティブな衝突』を起こしたかったけど、やり切れなかったのが心残りでしたね。

これからのSIAFがより国際的になるには、その独自性をとことん突き詰めることが大事だと思います。借り物じゃなくてその芸術祭「らしさ」の積み上げが世界中のアーティストや参加者への魅力になる。その受け皿としての事務局の体制や戦略、仕組みを設計することも同時に大切になるでしょう。

細川：芸術祭の『国際性』はいろいろな面があると思うんです。例えば、SIAF2014、2017では、世界的に活躍するゲストディレクターを迎えて国際的な視点でキュレーションを実施。それに加えてSIAF2020では、ディレクターチームのお一人に母語が日本語ではなく、事務局との共通言語が英語となる方を迎え、事務局の体制自体に国際性を意識し、即時的な英語の発信に繋がっていきます。SIAF2024ではオーストリア在住の日本人の小川さんを迎えることで、ヨーロッパのネットワークと繋がりながらも、日本語でのやりとりという意味疎通しやすさの両立を実現。こうして開催のたびに「国際性」に対しては課題意識を持って、アップデートしてきたんです。

最近訪れた韓国の光州ビエンナーレや釜山ビエンナーレでは、国際的な存在感を高めようという明確な意思を感じました。一方で、市民向けガイドツアーを積極的に行うなど、国際的な芸術の潮流を生活者に浸透させる工夫もありました。

世界中からアーティストが参加していたら国際的なのか、来場者がいろんな背景を持っていたら国際的なのか、考え方はいろいろです。今後は、SIAFでは『ユネスコ創造都市ネットワーク』や『冬の都市市長会』など、札幌市が加盟している国際的ネットワークとの連携を強めていくということも可能だと思います。今回の収録をきっかけに、SIAFの国際性について、これからも考え続けたいですね。
